JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	野生生物保護・管理とエコツーリズム : 持続可能な観光への道
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	Wildlife Forum, 13(2): 8-11
Issue Date	2008-08-05
Type	Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16979
Rights	Copyright (C) 2008 「野生生物と社会」学会. 敷田麻実, Wildlife Forum, 13(2), 2008, pp.8-11. http://dx.doi.org/10.20798/wildlifeforum.13.2_8
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

野生生物保護・管理とエコツーリズム
持続可能な観光への道

敷田 麻実（北海道大学　観光学高等研究センター）

今年の4月1日にエコツーリズム推進法が施行された。法律ができたことは、制度が整備されていくことであり、またエコツーリズムが社会的に認知されてきたことの表れでもある。このエコツーリズムとは「環境に配慮した旅行であるエコツアーをつくるという考え方と、それを生み出す仕組み」であり、「持続可能な観光(サステイナブルツーリズム)」の旗手として期待されている。

野生生物保護・管理の現場でも、エコツーリズムが保全と利用を両立するための「可能性」として話題となってきた。しかし野生生物保護・管理の難しさを知る関係者は、保護中心の対策とは異なる新たな展開を期待しつつも、エコツーリズムと保全が本当に両立するのかという漠然とした不安を抱かずにはいられない。彼らにとっては依然「不透明な選択肢」にすぎない。今号ではこのエコツーリズムを特集し、野生生物保護や管理におけるエコツーリズムの可能性を考えたい。

特集 エコ

●野生生物保護管理とエコツーリズム（P8～）
●エコツーリズムによる文化遺産の持続的管理と利用の最前線（P12～）
●エコツーリズムと生物多様性保全（P16～）
●知床におけるエコツーリズムとしての野生動物観察（P22～）

礼文島で高山植物を観察するエコツアー

必ずしも保護につながらないエコツアー

エコツーリズムは1980年代後半から世界的に普及し、現在では多くの観光地で「エコツアー」の言葉が旅行パンフレットに使われるようになった。エコツーリズムやエコツアーには、自然を楽しむ旅行者が楽しげに微笑む写真が添えられ、「適切な旅行」や「環境にやさしい旅行」のイメージが強い。

エコツアーは「自然環境への負荷を最小限にしながらそれを体験・学習し、目的地である地域に対して何らかの利益や貢献のある旅行あるいは旅行商品」である。前述したエコツーリズムが「理念」とその実現を図る仕組みであるのに対して、エコツアーは現実の「旅行」だ。つまり、観光地で参加するのはエコツアーであり、ツアーをつくり出すバックボーンがエコツーリズムである。ただし国内では、オプショナルツアーや、旅行商品ではない自然学校の活動である「プログラム」もエコツアーに含められている。

しかし、エコツーリズム抜きのエコツアーが存在できないわけではない。商品としてエコツアーと銘打っただけの旅行は、旅行業者であればすぐ催行できる。しかし、しっかりした考え方や仕組み（エコツーリズム）に基づかないエコツアーが企画・販売・催行されることもある。そのため、単にエコツアーを実施しただけでは野生生物保護・管理にとって「福音」がもたらされるわけではない。

エコツーリズムの理念の重要性

こうした問題はあるが、それはエコツーリズムの考え方や仕組み自体にあるのではない。1980年代に誕生したエコツーリズムは、その誕生の背景から、環境保全と観光の振

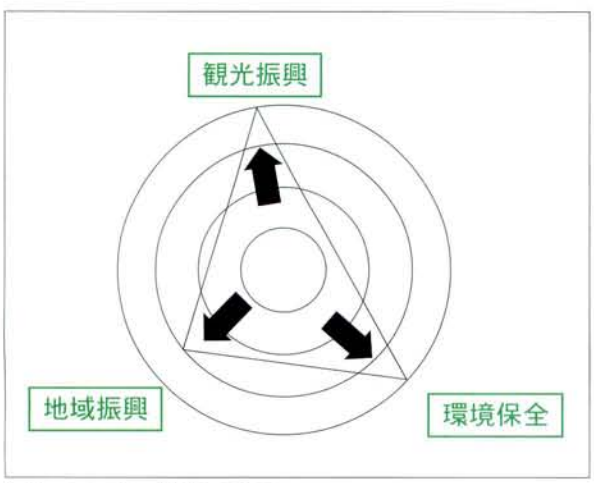

図-1　エコツーリズムの理念

興、そして（観光）地域の振興という3要素のバランスを取ることを理念としている(図-1)。この点では、地域環境の保全を無視した今までの観光開発や地域の利益を顧みない収奪に比較して、ずいぶん優れている。エコツーリズムには常にこの理念、つまりハイレベルのビジョンがついて回る。そのため資源状態の悪化を考慮しない、保全活動を無視するようなツアーの実施はしにくい。

ただし、理念はあくまでも理念である。それを実現するためには、エコツアーの実施現場となる地域やそれにかかわる関係者の「理想を現実に変える努力」が求められる。理念さえあればうまくいくのではなく、地域の現場でそれを持続可能な観光という「形」に変える必要がある。

ところで、図-1の三角形は、地域によって「形」が変わっても良い。ある地域では、保全に注力し、また別の地域では観光振興を重視することがあってもいい。その方がエコツーリズムというグローバルな考え方の単なるコピーに終わらず、地域の独自性・自律性を考慮できるからだ。

エコツーリズムの仕組みとは

次に、エコツーリズムの仕組みについて解説したい。エコツーリズムでは、地域外から旅行者が来て、地域(観光地)の観光資源を消費して出発地に戻るという「基本設定」がある。そのため、観光資源をもとにツアー(旅行商品)をつくって消費者に販売する仕組みが必要だ。しかしそれだけでは今までの観光と変わりはない。実は、エコツーリズムという仕組みの特徴は、観光のメリットを地域へ還元することにある。

その構造を図式化したのが図-2である。図の左にあるのが観光対象となる「地域資源」だが、そのままでは地域外の旅行者に提供することはできない。そこで地域資源に手を加え、付加価値をつけて「商品化」する(①)。具体的にはツアープログラムを作成したり、現地でのアクティビティ（カヌーや散策などの参加者の活動）プランをつくったりすることである。

しかし商品化しただけは、旅行者には売れない。そこで次のプロセスである「販売」が必要になる(②)。そして消費者に旅行商品が売れれば、旅行者として地域にやってくる(③)。

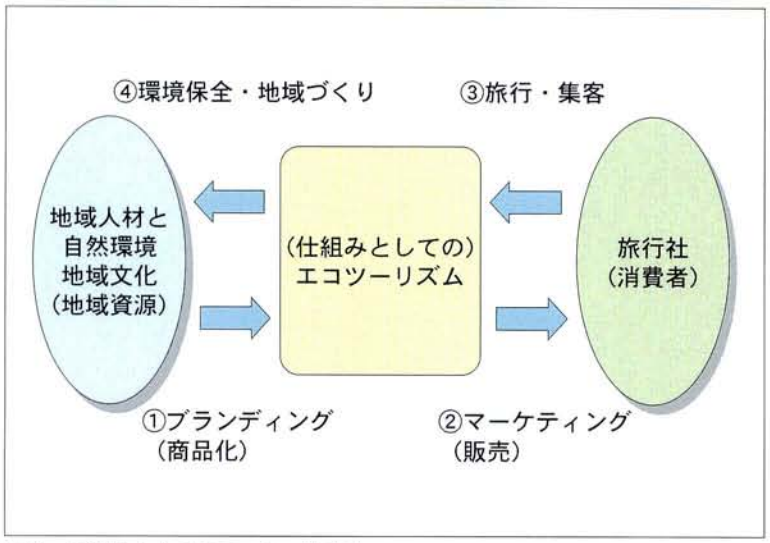

図-2　仕組みとしてのエコツーリズム

知床のツアーガイドとエコツーリスト

ところが、エコツーリズムの完成のためにはもう一歩必要である。エコツーリズムの理念に従うのであれば、エコツアーの販売で得た収益の一部を観光振興だけではなく、環境保全や地域振興にも振り向けなければならない。それが④のプロセスである。実際には、保全費用を負担したり、関係者が保全活動に参加したりすることによって達成される。

以上が「仕組みとしてのエコツーリズム」である。結局エコツーリズムとは、地域資源の価値を上げ、商品化して販売し、そこから保全費用などを確保する活動全体のことだと考えてよい。そして、その循環そのものを創ることが「持続可能な観光」である。

野生生物保護・管理とエコツーリズム

一見関係がなさそうに思える野生生物とエコツーリズムだが、実際の現場では交差する機会は多い。野生生物、特に大型のそれや高山植物などは、野生生物保護側が好むと好まざるとにかかわらず観光資源となる。こうした「観光地化」に異議を唱えても、踏み込んでくる旅行者を排除することは容易ではない。そこで、今までの観光から「被害を受ける」立場を超えて、野生生物保護側が積極的に「観光」にかかわり、観光化によるデメリットを低減し、逆にそこからメリットを生み出す努力をしてはどうか。それこそが「したたかな」野生生物保護・管理であろう。

実は、私たちの課題もそこにある。社会と距離を置き、野生生物保護・管理の専門領域に閉じこもっていてはもはや実質的な保護・管理はできない。エコツーリズムの実現は、独り相撲に陥りがちな野生生物保護関係者に、観光関係者や地域外の観光客という異質な「他者」と渡り合う機会を与えてくれる。その実践ができるなら、エコツーリズムは「不透明な選択肢」ではない。

【エコツーリズムについての参考図書】

なお本稿で解説した内容は、敷田麻実ほか（2008）『地域からのエコツーリズム』（学芸出版社）208p.でエコツアーの実践方法も含めて詳しく解説しているので参考にしていただきたい。またエコツーリズムにかかわる現場の人々については、海津ゆりえ（2007）『日本エコツアー・ガイドブック』（岩波書店）264p. に詳しい。